様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２６１４
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ０３６５９

研究課題名（和文）境界研究の分析法を用いた国境・境界地域における基礎教育に関する国際比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study on Basic Education in Borderlands Applying the Method of Border Studies

研究代表者
森下　稔（MORISHITA, Minoru）

東京海洋大学・学術研究院・教授

研究者番号：６０３００４９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　29,000,000円

研究成果の概要（和文）：国境・境界の通りやすさを示す「透過性」で、東南アジア諸国間やアメリカ・メキシコ国境、フィンランド・ロシア国境を見たとき、透過性が高い時に越境通学する事例があり、透過性が低い時に教育交流や本国の教育制度に接続できる教育機関の事例があることが明らかとなった。また、国境の歴史的経緯や変動する国境の透過性によっても教育や文化に影響があること、国境地域は国内の他地域に対する比較優位性があること、国境地域の人びとによる日常的な比較教育の実践が行われていることが発見された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究によって、これまで空白であった国境・境界地域の教育について越境通学の事象が存在することなどの新たな発見があった。また、国境・境界地域は中央に対する周縁ではなく、国境・境界の向こう側との接点であり、重要性が高いことが明らかになった。また、「国境・境界地域」を新たな分析単位として、共通性と差異性のメタ的な比較分析が可能となった。さらに、国境・境界地域を分析する上で、その両側を比較することは必須であり、比較教育学がグローバリゼーション時代の教育分析に必要とされることがより明確となった。

研究成果の概要（英文）：Analyzing the borders among Southeast Asian countries, the US-Mexico border, and the Finland-Russia border in terms of "permeability," which indicates the extent to which a border is easy to cross, it became clear that when permeability is high, there are cases of cross-border commuting, and when permeability is low, there are cases of educational exchange and institutions that can connect to the education system in the home country. It was also found that the history and varying permeability of borders also affect education and culture, that border regions have a comparative advantage over other regions of the country, and that there is a daily practice of comparative education by people in border regions.

研究分野：比較教育学

キーワード：比較教育学　基礎教育　国境・境界地域　境界研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

## １．研究開始当初の背景

グローバリゼーションの進展とともに、国境を越えたヒト・モノ・情報の流れが活発になってボーダレス化が進み、様々な社会システムが国内では完結せず、国際的なネットワーク構築や相互依存が顕著になっている。そのため、現代社会の実態を解き明かすとき、ボーダレス化は欠かせない視点となる。教育学では、どのようにしてボーダレス化する社会における教育事象を解き明かしていくべきなのかが問われると考えられる。

比較教育学は、世界各国の教育について深く掘り下げて分析することによって、その専門性を高めてきた。ボーダレス化した現代において、比較教育学の強みを発揮して教育学および社会科学の発展にどのように貢献することができるかは、比較教育学が直面する最大の課題である。他方、比較教育学における地域研究は一国研究に留まる傾向にあり、理論的志向が弱いと指摘されてきた。国を単位として研究を行うことが多い比較教育学では、国境・境界地域の教育が着目されることは多くなかった。まして、国境線を研究者が実際にその足で越えるような研究はほとんど見られなかった。研究者の典型的な行動としては、制度・政策を分析するために、まず首都の中央政府における資料収集を行い、次にフィールドワークによって実際の状況を解明しようとする。個人研究では全国の学校を網羅するような調査は困難であることから、局所的な調査にならざるを得ない。そうであっても国全体を説明できるような代表性・一般性が常に課題とされてきた。そのとき、国境･境界地域は特殊・周縁的であると暗黙の裡に捉えられてきたのではないかと考えられる。

研究データベースを検索すれば「国境を越える教育」に類する著書論文は多数出てくるが、いずれも「国際的な」と言い換えることができるもので、実際に国境を歩いた研究成果ではない。「越境」も比較教育学ではよく用いられる。この場合の「越境」とは研究の視角の取り方なのであって、国境・境界地域を研究者が歩くことは含意されていない。

国境･境界地域をフィールドとする比較教育学研究には、少数民族をテーマとするものなど優れたものも少なくない。しかし、研究の視点としては、中央－周縁の図式であり、そこでの国境とは中央による政策が行き届く末端のようなものである。近年、移民や難民の子女への教育に注目が集まっているが、国境・境界地域とは一時滞在する場所であって、さらなる移動が目指されていることから、国境・境界地域での教育に焦点が当てられることはない。そのため、国境・境界地域の教育は学術上の空白となっている。

本研究が国境･境界地域における教育に着目することになったのは、これまでの実証的な研究活動における国境・境界地域教育の特異性の発見があったからであった。具体的には、大陸部東南アジア諸国における共同研究の調査過程で、その特異性が明らかとなった。まず、タイにおけるアセアン市民性教育の取り組みとして 2010 年に開始された Sprit of ASEAN 事業では、国境地域の学校がモデル校に指定され、アセアン共同体発足に向けた先進的モデルが開発されていた。また、カンボジア教育省アセアン局において、カンボジア・ラオス・ベトナムの国境が接する「開発の三角地帯」で三カ国共通の相互理解教育を開発する計画があるという情報を得た。これらは国境地域のフロンティア化として捉えられる。タイ・ラオス間国境のメコン川両岸を結ぶ橋が開通したところでは、ラオス側に巨大な物流拠点やカジノが建設され、今後の雇用期待から学校教育に影響を与えていた。これは国境地域のゲートウェイ化として捉えられる。中国雲南省徳宏チンポー族タイ族自治州では、ミャンマーとの国境地域の学校が「国門学校」に指定され、ミャンマー側に居住する少数民族子女が中国側負担によって無償で越境通学する事例が存在した。タイ北部国境地域には、国共内戦後敗走してタイに定住した中国系児童生徒が通う華文学校が 80 校あまり存在している。台湾からの支援を受け、中国語や中国文化を継承させることを目的としていたが、雲南省とタイ北部間の陸路での往来が近年盛んになり、中国語の有用性に期待して近隣の少数民族子女が多く通うようになっていた。このように、アセアン共同体の発足や中国の「一帯一路」戦略によって国境の透過性が高くなるとともに、様々な教育事象が国境地域に生じていることが確認された。

他方、社会諸科学では境界研究（ボーダースタディーズ）が最近になって盛んになっている。北米では 1970 年代からボーダースタディーズが言われ始め、日本では日本国際政治学会の『国際政治』162 号（2010 年）における特集「ボーダースタディーズの胎動」が始まりと言われている。ボーダースタディーズでは、国境・境界地域（borderlands）とは、国境・境界付近に居住する人々の生活圏を指すとともに、国と国を繋ぐゲートウェイであると考える。国境・境界は固定化された壁ではない。多くの場合、国家権力による国境管理の下でヒト・モノを通過させる膜あるいはフィルターのようなものといえる。言い換えれば､国境･境界は行き止まりではない。越境した先を意識して同地の社会を見ると、他国との接点であるために国際化の観点から見て国内最先端の事例が生じる場合や、通過の準備のために拠点が形成されてゲートウェイになる場合があると考えられる。国境・境界が何を通し、何を通さないか、さらにはどの程度通すのかが、境界研究では「透過性（permeability）」という概念で説明される。また、オスカー・マルチネスが提示した透過性の 4 類型が境界研究ではしばしば援用される。4 類型とは、①疎外、②

共存、③相互依存、④統合である。そして、理論的には時間的経過と共に①から④に向かって変容するとのことである。しかし、このマルチネス類型は便利ではあるが、比較研究の実証のためには具体的な境界地域の特性およびヒトとモノの透過性をかなりミクロに分析する必要があると論じられることがあり、このことはフィールドワークの重要性に繋がる。透過性は社会情勢によって変動するもので、決して固定的ではない。

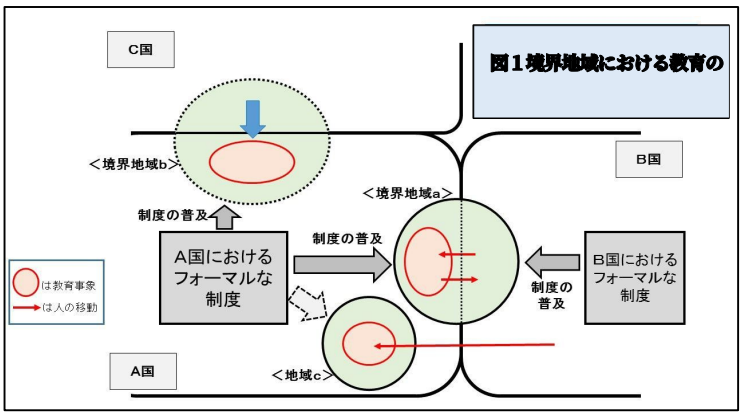
このようなボーダースタディーズの分析法に学びながら、国境・境界地域の教育を正面から捉える共同研究が求められる。この研究を通じて、国境・境界地域の教育を比較するための手法として新たな比較教育学方法論を構築できるという意義も見いだせる。教育のボーダースタディーズは未開拓・空白の分野である。また、国民教育研究において前提とされてきた「中央－周縁」の構図を乗り越えて、「中央－境界地域－境界の向こう側」という実態に適した視点をもつことにより、現代の教育事象をより多面的に理解するための新たな視座を提示できる意義があると考えた。

## ２．研究の目的

本研究「境界研究の分析法を用いた国境・境界地域における基礎教育に関する国際比較研究」では、国境・境界地域における基礎教育（初等教育および中等教育）を調査の対象とし、次の四つの目的を設定した。まず、①国境・境界地域での特徴的な教育事象の実態を解明し、②その教育事象が生じることになった歴史的背景や社会・政治・経済などの要因が何かについて、境界研究の分析法を用いて解明する。その上で、個別事例の比較分析を行うことによって、③国境・境界地域の教育が解明されてはじめて浮かび上がる現代の教育事象とは何かを明らかにする。そして、こうした分析の過程を通じて、④国境・境界地域の教育を比較するための手法として新たな比較教育学方法論を構築する。

比較教育学の国民教育研究では従来、国境・境界地域は周縁・特殊として考えられ、主たる研究対象とならなかった。本研究は「中央－境界地域－境界の向こう側」という独自の視点で、国境・境界地域の教育に関する学術的空白を埋め、比較教育学の強みを発揮して教育学および社会科学の発展に貢献しようとするものである。

## ３．研究の方法




本研究では、国境・境界地域における調査により、①特徴的な基礎教育の実態を明らかにし、②その実態がどのような要因によって生じたのかを明らかにしようとした。また、③変動する国境・境界の透過性による差異性・共通性を事例間の国際比較を行った。図１は比較のためのモデルである。<境界地域 a>は、透過性が高い場合に児童生徒が越境するモデルであり、A 国の内部でありながら B 国の影響を受けた教育の独自性が生じる。一方、<境界地域 b>は、透過性が低く越境は困難であるモデルであり、C 国を意識した教育の独自性が生じる。そして、<地域 c>は A 国内部に移民・難民が集住して B 国の教育が存在するモデルである。調査地については、地域共同体が発足して透過性が高まっていると考えられる東南アジア諸国間の国境地域、EU とロシアの境界としてフィンランドとロシアの国境地域、長大な国境線を持つ大国では隣接する国・地域による透過性に多様性があると考えられることからアメリカおよび中国の国境・境界地域とした。

実際には、コロナ禍の影響で海外渡航制限が続いたことから、2019 年度末から長期間にわたって計画通りに調査を実施することができなかった。また、中華人民共和国における外国人研究者による調査が実施できない状況となり、中国人の研究協力者に調査を依頼する計画変更を行った。渡航制限緩和とともに、実施可能な調査地および調査項目に限定しながら調査を再開し、2023 年度末まで研究期間を延長してある程度の調査が実施できた。

これらの調査対象地域においては、国境・境界の透過性と地域の特色を把握した上で、基礎教育機関や地方教育行政組織等の訪問先において、インタビューや観察、文献・資料の収集を行った。これらの調査の成果など、研究メンバーが個別に持つ情報を集約・統合するために、研究打ち合わせ会議を通算で 13 回実施した。さらに、これらの成果を日本比較教育学会などの国内学会、世界比較教育学会・アジア比較教育学会・北米比較国際教育学会などの国際学会で発表するとともに、『比較教育学研究』『境界研究』『ロシア・ユーラシアの社会』などの専門雑誌での特集論文などで成果を発信した。

## ４．研究成果

本研究の主な研究成果は、次の 3 点の学術誌における特集の合計 11 本の論文で概観することができる。①『比較教育学研究』第 60 号（2020）特集「比較教育学におけるボーダースタディーズの可能性」（論文 4 本）、②『ロシア・ユーラシアの社会』2021 年 11-12 月号（No.1059）特集「フィンランド・ロシアの境界地域カルラヤ／カレリアの教育事情」（論文 3 本）、③『境界研究』第 13 号（2023）特集「比較教育学とボーダースタディーズ」（論文 4 本）。（それぞれの論文タイトル等は、後掲の「主な発表論文等」を参照）

これらの 11 本の特集論文では、本研究の目的のうち、①国境・境界地域での現地調査を通じて、各事例における基礎教育の特徴的な実態を解明すること、および②その教育事象が生じることになった歴史的背景や社会・政治・経済などの要因を境界研究の分析法を用いて解明することについてそれぞれの成果を上げたものである。本研究では、教育学の分野で初めて境界研究の分析法を用いて研究に取り組んだことから、試行錯誤しながらの探索的な経緯をたどることになった。そのような中で、もっとも有用な境界研究の分析法とは、国境・境界の「透過性（permeability）」の概念を活用することであった。透過性とは、簡潔に言えば国境・境界が何を通し、何を通さないか、通すとすればどの程度通すのかという概念である。つまり、透過性が高ければその国境・境界は通りやすく、透過性が低ければその国境・境界は通りにくい。また、透過性は一定ではなく、社会情勢などによって変動する性質を持つ。例えば、コロナ禍では透過性が高かった国境・境界でも閉鎖されたり、移動制限が強められたり、急激に透過性が低くなる現象が世界各地で見られた。さらに、国境・境界の状況は各地で非常に多様であり、フィールドワークによって明らかにされる事象は個別的であるが、透過性という共通の観点からそれらの諸事象を貫通させて比較分析することができるという意義も見出された。次に有用な分析法であったのは、ボーダーの変遷を説明するマルチネスモデルであった。時間的経過によって、ボーダーで接する両側の社会や国家の関係性が①疎外、②共存、③相互依存、④統合と変遷する性質を持つということである。端的に言えば、国境・境界は生成したり、消滅したりする。また、国境・境界は領土交換や侵略・線量などによって移動することもある。

特集論文において分析された各事例でみると、まず、透過性が高い場合に、越境通学の事例が発見されたという成果が得られた。つまり、就学前教育、初等教育、中等教育のように、国民統合のための国民形成を主要な目的とするような教育段階の隣国の学校に、自国内の自宅に居住しながら、毎日国境を越えて通学する事例である。本研究のフィールドワークで確認された例としては、メキシコからアメリカへ、ミャンマーからタイや中国へ、カンボジアからタイへ、ラオスからタイへの越境通学があった。次に、透過性が低い場合には、越境通学現象は観察されなかったが、フィンランド・ロシア国境のように、児童・生徒や教員の相互訪問や教員研修などによる教育交流が盛んに行われており、国境地域特有の事象として注目された。なお、コロナ禍の影響やウクライナへのロシアの軍事侵攻によって、このような事象は見られなくなったようである。また、ボルネオ島（マレーシア名）・カリマンタン島（インドネシア名）で国境を接するマレーシアとインドネシアの場合、高く険しい山地に遮られているため国境の透過性は低いものの、マレーシア側に定住するインドネシア人労働者の子弟のために、本国インドネシアの教育制度に接続できる教育機関の設置が行われている事例が見られた。類似の事例として、ラオスと中国の国境のラオス側に、中華人民共和国の教育制度に接続できる私立学校が設置されていたが、この場合は中国語の習得によって子どもの将来の可能性を期待するラオス人向けのものであった。特殊な事例としては、カンボジア国内に居住するベトナム系住民の事例があった。この人びとはベトナム戦争やカンボジア内戦の混乱の中で、カンボジア領内に留まったベトナム系の人びとでカンボジアからもベトナムからも国籍を認められていない無国籍状態である。そのため、カンボジアの公立学校への就学が認められず、学校教育そのものが境界づけ（bordering）機能を持っていることが指摘された。つまり、教育対象とする子どもと、対象とされない子どもを区別しており、学校が排除と包摂の舞台となりうるということである。

さて、国境・境界地域における教育事象から本研究メンバーが発見したことは以下のようなことであった。第一に、歴史的に見て、国境・境界は生成・消滅・移動することが、ボーダーの両側の共通性、住民帰属変更など、教育や文化に関わる影響が見られるということ、言い換えるとボーダーによる教育上の分断と越境（排除と包摂）が見られるということである。例えば、米墨戦争によってアメリカ合衆国の領土拡大、タイとフランス領インドシナの領土交換、ランナー王国（現タイ北部）へのビルマ（現ミャンマー）による侵攻とシャム（現タイ）によるランナー王国併合およびビルマからの領土回復などによる影響である。第二に、「透過性」は一定ではなく、動的なものであることからの国境・境界地域における教育への影響である。本研究が調査した各地域では、ボーダーの両側（時として三方）の政治的な関係による透過性の変化が、国境・境界地域の人びとの間に宥和、敵対、和解、交流促進などの影響が見られた。同じく、経済的な関係による変化も見られ、経済圏の形成、物流網や物流拠点の形成、労働力の移動などの影響が見られた。国境ではヒトやモノの国境管理が行われるため、越境に備えて国境地域にはヒトやモノが集積し活況を呈する状況が生じやすく、民族や使用言語の重層性が形成される傾向にある。そのため、教育内容や教授言語への影響が見られる。また、国境地域の教育を充実させることは国境地域の安全保障の意味も見出されることが中国雲南省の事例から読み取れた。さらに、透過性が動的なものであることはコロナ禍の世界的な国境閉鎖でより鮮明になったと言える。第三には、

国境・境界地域（いわゆるボーダーランド）の比較優位性があることが明らかとなった。上述のように国境地域では地域経済の活況が生まれ、国境地域である故にその地域に特有の人材育成の必要性が生じていた。例えば、中国やタイでは、中央政府によって国境地域の教育を振興する政策が促進されていた。また、教育機関が越境することを本国から支援が見られる事例もあった。例えば、ラオスにある中国式の私立学校や、マレーシアにあるインドネシア式の学校の例である。第四には、越境通学の事例の場合、保護者によって「比較教育」の実践が行われていたことの発見である。それは学問としてではなく、自分たちの子どものための日常的な実践として、国境のこちら側の学校と国境の向こう側の学校の比較の営みである。例えば、アメリカの学校の教授用語は英語であり、メキシコのそれはスペイン語であることのように言語習得とそれによる将来展望の比較である。同様のことは、タイの学校ではタイ語の教育、カンボジアの学校ではクメール語の教育が行われていることの比較でも言える。あるいはアメリカやタイのように全日制でランチの提供がある教育制度と、メキシコやカンボジアのように二部制でランチがない教育制度の比較も行われていた。つまり、将来の就業機会への期待や、保護者の養育負担・就学経費負担の大小が日常的、実践的に比較されていた。

本研究の第 4 の目的は新たな方法論の構築があった。その点では、研究の視座の転換が具体的な研究の中で実践できたことが一歩前進として認められる。つまり、国境地域の教育を見る視座が従来の「中央－周縁」から「中央－国境・境界地域－国境・境界の向こう側」というように転換することである。そのことによって、これまでの研究が見逃してきた教育事象を発見することに繋がった。また、「国境・境界地域」を新たな分析単位として、共通性と差異性のメタ的な比較分析が可能になった。つまり、「アメリカとメキシコの比較」と「タイとカンボジアの比較」の比較を行うことができるようになったということである。ただし、コロナ禍の影響で、繰越後の 2023 年度末まで各地でのフィールドワークが続いたために、方法論の構築はまだ着手されたばかりである。

このように方法論の構築をより高めることが今後の課題の一つとなるが、さらには越境通学児童の存在が発見されたことによって、越境通学と国民形成の関係性がどうなっているのかについて解明するという新たな課題が生じた。これらの点について、すでに本研究のメンバーの一部による共同研究（基盤研究 B22H00974「越境通学児童の実証的比較研究－国境の透過性及び国民形成との関係を中心に－」2022-2025 年度）（2024 年度から基金化により 22K22245 へ番号変更）によって並走しながら探究が始まっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計24件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　14件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>森下 稔 | ４．巻<br>1059 |
| ２．論文標題<br>国境・境界地域における教育を研究する共同研究プロジェクトについて | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>ロシア・ユーラシアの社会 | ６．最初と最後の頁<br>3～9 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.57532/roseursoc.2021.1059_3 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>森下 稔、渡邊 あや、澤野 由紀子 | ４．巻<br>1059 |
| ２．論文標題<br>＜特集＞フィンランド・ロシアの境界地域カルヤラ／カレリアの教育事情ー本特集の趣旨 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>ロシア・ユーラシアの社会 | ６．最初と最後の頁<br>2～2 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.57532/roseursoc.2021.1059_2 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>渡邊 あや、澤野 由紀子 | ４．巻<br>1059 |
| ２．論文標題<br>フィンランドーロシアの境界地域カルヤラ／カレリアの概要 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>ロシア・ユーラシアの社会 | ６．最初と最後の頁<br>10～22 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.57532/roseursoc.2021.1059_10 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>渡邊 あや | ４．巻<br>1059 |
| ２．論文標題<br>フィンランド共和国北カルヤラ県の教育事情 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>ロシア・ユーラシアの社会 | ６．最初と最後の頁<br>23～38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.57532/roseursoc.2021.1059_23 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>澤野 由紀子 | 4．巻<br>1059 |
| 2．論文標題<br>ロシア連邦北西部のボーダーランド、カレリア共和国の教育事情 | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>ロシア・ユーラシアの社会 | 6．最初と最後の頁<br>39～73 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.57532/roseursoc.2021.1059_39 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>山﨑 直也 | 4．巻<br>24 |
| 2．論文標題<br>高校生に向けた実践―SNET台湾の活動を中心に― | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>日本台湾学会報 | 6．最初と最後の頁<br>6～13 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>山﨑 直也 | 4．巻<br>11 |
| 2．論文標題<br>金門島スタディツアーを設計する ： 台湾研究のアウトリーチの一方法として | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>境界研究 | 6．最初と最後の頁<br>43～54 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14943/jbr.11.43 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>荻巣崇世 | 4．巻<br>13 |
| 2．論文標題<br>「境界」としての学校― カンボジアの学校教育を通したベトナム系住民の排除と包摂 | 5．発行年<br>2023年 |
| 3．雑誌名<br>境界研究 | 6．最初と最後の頁<br>65～82 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14943/jbr.13.65 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>鴨川明子 | 4．巻<br>13 |
| 2．論文標題<br>サバ州におけるインドネシアにルーツを持つ子どもの就学機会とその課題― 国境・境界地域に行き届く国民教育の透過性 | 5．発行年<br>2023年 |
| 3．雑誌名<br>境界研究 | 6．最初と最後の頁<br>83～106 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14943/jbr.13.83 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>劉靖・北村友人 | 4．巻<br>13 |
| 2．論文標題<br>中国の国境地域における「国門学校」の現状と課題―政策文書ならびに学術論文の分析にもとづく― | 5．発行年<br>2023年 |
| 3．雑誌名<br>境界研究 | 6．最初と最後の頁<br>107～120 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14943/jbr.13.107 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>乾美紀 | 4．巻<br>13 |
| 2．論文標題<br>ラオス北部中国国境地域における教育観の変化に関する研究 | 5．発行年<br>2023年 |
| 3．雑誌名<br>境界研究 | 6．最初と最後の頁<br>121～139 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14943/jbr.13.121 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>石村 雅雄 | 4．巻<br>37 |
| 2．論文標題<br>ベトナム社会主義共和国の市民教育の課題 ：「普遍的シティズンシップ」の問い直しと社会主義シティズンシップの可能性 | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>鳴門教育大学研究紀要 | 6．最初と最後の頁<br>80～89 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.24727/00029369 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>楠山研 | 4．巻<br>2022年4月号 |
| 2．論文標題<br>教育の普及・充実の延長としての中国版ゆとり教育―古くて新しい「双減」政策の意味― | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>月刊東亜 | 6．最初と最後の頁<br>10～15 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Ogisu Takayo、Hagai Saori | 4．巻<br>53(1) |
| 2．論文標題<br>Localizing transnational norms in Cambodia: cases of ESD and ASEAN citizenship education | 5．発行年<br>2023年 |
| 3．雑誌名<br>Compare: A Journal of Comparative and International Education | 6．最初と最後の頁<br>1～18 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1080/03057925.2023.2170696 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>鴨川明子 | 4．巻<br>64 |
| 2．論文標題<br>マレーシアの学校に行けない子どもたち（OOSC）―「最後のターゲット」貧困層・遠隔地・先住民に対する支援― | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>比較教育学研究 | 6．最初と最後の頁<br>145～160 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>森下稔 | 4．巻<br>60 |
| 2．論文標題<br>特集の趣旨（特集：比較教育学におけるボーダースタディーズの可能性） | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>比較教育学研究 | 6．最初と最後の頁<br>94-96 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>岩下明裕 | 4．巻<br>60 |
| 2．論文標題<br>［基調講演］ボーダースタディーズとは何か－教育と社会の現場に向き合って－ | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>比較教育学研究 | 6．最初と最後の頁<br>97-110 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>市川桂・鈴木賀映子 | 4．巻<br>60 |
| 2．論文標題<br>越境する子どもを取り巻く制度と背景に関する研究―アメリカ・メキシコ国境を事例に― | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>比較教育学研究 | 6．最初と最後の頁<br>111-127 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>羽谷沙織・森下稔 | 4．巻<br>60 |
| 2．論文標題<br>タイ＝カンボジアを越境する子どもたちと国境を越えた教育機会 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>比較教育学研究 | 6．最初と最後の頁<br>128-147 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>鴨川明子・金子奈央 | 4．巻<br>60 |
| 2．論文標題<br>国境地域に行き届く国民教育制度－マレーシア（サバ州）－インドネシア（北カリマンタン州）－ | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>比較教育学研究 | 6．最初と最後の頁<br>149-162 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>カンピラパーブ　スネート・ウンゴーン　ティダワン | 4．巻<br>60 |
| 2．論文標題<br>タイ北部チェンライにおける外国籍・無国籍児童生徒の就学状況とその課題 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>比較教育学研究 | 6．最初と最後の頁<br>163-178 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>森下稔 | 4．巻<br>10 |
| 2．論文標題<br>ボーダースタディーズに出会った比較教育学の研究動向 | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>境界研究 | 6．最初と最後の頁<br>93-101 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.14943/jbr.10.93 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>森下　稔 | 4．巻<br>57 |
| 2．論文標題<br>境界研究が拓く比較教育学の可能性 | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>比較教育学研究 | 6．最初と最後の頁<br>73ー86 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>楠山　研・森下　稔 | 4．巻<br>45 |
| 2．論文標題<br>タイ北部国境地域「難民村」における華文学校の教育－越境する教育の理念および歴史に関する一事例として－ | 5．発行年<br>2018年 |
| 3．雑誌名<br>九州教育学会研究紀要 | 6．最初と最後の頁<br>21ー28 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計35件（うち招待講演　6件／うち国際学会　11件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>森下稔 |
| ２．発表標題<br>タイにおける国境警備隊学校の歴史的な意義に関する考察 |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第57回大会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>森下稔 |
| ２．発表標題<br>学校に行けない子どもたち（OOSCY）とは―アセアン諸国における就学阻害要因と教育協力ネットワークの展開― |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第57回大会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Thidawan UNKONG and Sunate KAMPEERAPARB |
| ２．発表標題<br>Case Studies on the Learning Environment of Migrant Children during the COVID-19 Pandemic : From the Field Study in Three Schools in Chiang Rai, Thailand |
| ３．学会等名<br>国際教育研究フォーラム2022年第2回例会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Sunate KAMPEERAPARB and Thidawan UNKONG |
| ２．発表標題<br>Educational Experiences of Foreign and Stateless Children in Chiang Rai Province, Thailand : Challenges amid the COVID-19 Pandemic |
| ３．学会等名<br>The 67th Annual Meeting of the Comparative and International Education Society（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Saori Hagai, Minoru Morishita |
| ２．発表標題<br>Cambodia-Thailand Cross-Border Education: Poverty, Vulnerability and Childcare Nexus |
| ３．学会等名<br>Comparative Education Society of Asia 12th Biennial Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>森下稔 |
| ２．発表標題<br>タイにおける軍事暫定政権の教育政策の特質―プラチャーラット学校プロジェクトを中心に― |
| ３．学会等名<br>九州教育学会第73回大会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>森下稔 |
| ２．発表標題<br>フランスによる統治を経験したタイ東部トラート県における国民形成に関する考察 |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第58回大会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>楠山研・森下稔 |
| ２．発表標題<br>日本国内における教育学的境界研究の序論的考察 ―国境の島・対馬を対象として― |
| ３．学会等名<br>九州教育学会第74回大会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>市川桂 |
| ２．発表標題<br>米墨国境地域の学校と教員－2020年2月のフィールド調査をもとにして |
| ３．学会等名<br>アメリカ教育学会第32回大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>鈴木賀映子・市川桂 |
| ２．発表標題<br>国境地域の教師を取り巻く環境と求められる資質能力－アメリカ・メキシコ国境を事例に |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第57回大会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kaeko Suzuki and Katsura Ichikawa |
| ２．発表標題<br>A Study on the Phenomena and Issues of Education in Borderland: A case study of the U.S.- Mexico border |
| ３．学会等名<br>WERA 2021（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Katsura Ichikawa and Kaeko Suzuki |
| ２．発表標題<br>Systems and Background of the U.S.- Mexico Trans-border  Students |
| ３．学会等名<br>Comparative Education Society of Asia 12th Biennial Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>市川桂 |
| ２．発表標題<br>メキシコからの越境児童と国境を越える教員研修 |
| ３．学会等名<br>アメリカ教育学会第33回大会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>乾美紀 |
| ２．発表標題<br>ラオス北部と中国国境地域における教育観の変化に関する研究 ―「一帯一路」構想が及ぼす影響を中心に― |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第57回大会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Akiko Kamogawa |
| ２．発表標題<br>How is Malaysia Trying to Reduce OOSCY?, Panel Session A Comparative Study on Out-of-School Children in Southeast Asia |
| ３．学会等名<br>Comparative Education Society of Asia 12th Biennial Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>羽谷沙織 |
| ２．発表標題<br>タイ＝カンボジア越境を移動する子どもたちと国境を越えた教育機会 |
| ３．学会等名<br>国際教育研究フォーラム |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Katsura Ichikawa and Kaeko Suzuki |
| ２．発表標題<br>Border Studies and Comparative Education: A Case Study of the U.S.-Mexico Borderland |
| ３．学会等名<br>XVII World Congress of Comparative Education Societies（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Minoru Morishita and  Ken Kusuyama |
| ２．発表標題<br>Chinese Schools of “Refugee Villages” in Northern Borderlands of Thailand: A Case of Border Studies in Comparative Education |
| ３．学会等名<br>XVII World Congress of Comparative Education Societies（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Unkong Thidawan |
| ２．発表標題<br>The Management of Basic Education in Special Economic Zones: A Case Study of Chiang Rai, Thailand |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第55回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>鴨川明子・金子奈央 |
| ２．発表標題<br>マレーシア サラワク州・サバ州の国境地域における教育 ― ブルネイとインドネシアとの国境 |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第55回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>平田利文・森下稔 |
| ２．発表標題<br>タイ国ラノーン県におけるミャンマー児童の国立初等学校への就学 |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第55回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>岩下明裕 |
| ２．発表標題<br>「ボーダースタディーズとは何か：教育と社会の現場と向き合って」 |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第55回大会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>鈴木賀映子・市川桂 |
| ２．発表標題<br>国境を越えること、子どもたちと出会うこと：アメリカ＝メキシコ国境の現在 |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第55回大会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>羽谷沙織・森下稔 |
| ２．発表標題<br>国境を越えること、子どもたちと出会うこと：タイ＝カンボジア国境の現在 |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第55回大会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>カンピラパーブ　スネート |
| ２．発表標題<br>タイ北部チェンライ県における外国籍・無国籍児童生徒に対する教育の現状 |
| ３．学会等名<br>日本タイ学会2019年度研究大会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>森下稔 |
| ２．発表標題<br>タイにおける越境通学するカンボジア児童の教育の現状 |
| ３．学会等名<br>日本タイ学会2019年度研究大会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>森下稔・平田利文 |
| ２．発表標題<br>タイにおける不就学児童および就学継続が困難な児童のための支援政策と現状 |
| ３．学会等名<br>九州教育学会第71回大会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Minoru Morishita |
| ２．発表標題<br>How Does ASEAN Integration Affect Basic Education in the Greater Mekong Subregion? |
| ３．学会等名<br>The 11th Biennial Comparative Education Society of Asia Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Thidawan UNKONG, Sunate KAMPEERAPARB and Koro SUZUKI |
| ２．発表標題<br>How does ASEAN integration affect basic education in the Greater Mekong Subregion?: A Case of Thailand |
| ３．学会等名<br>The 11th Biennial Comparative Education Society of Asia Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Saori Hagai and Takayo Ogisu |
| ２．発表標題<br>How does ASEAN integration affect basic education in the Greater Mekong Subregion?: A Case of Cambodia |
| ３．学会等名<br>The 11th Biennial Comparative Education Society of Asia Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Miki Inui |
| ２．発表標題<br>How does ASEAN integration affect basic education in the Greater Mekong Subregion?: A Case of Lao PDR |
| ３．学会等名<br>The 11th Biennial Comparative Education Society of Asia Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>森下　稔・カンピラパーブ　スネート・鈴木　康郎・楠山　研・石村　雅雄・乾　美紀・羽谷　沙織・荻巣　崇世・平田　利文 |
| ２．発表標題<br>大メコン圏諸国の基礎教育におけるASEAN統合のインパクトに関する比較研究 |
| ３．学会等名<br>日本比較教育学会第54回大会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>森下　稔 |
| ２．発表標題<br>トラート県の教育―カンボジアとの国境地域における教育事象の特徴とその背景― |
| ３．学会等名<br>日本タイ学会2018年度研究大会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>森下　稔・平田利文 |
| ２．発表標題<br>タイの沿岸国境地域における国立初等学校に就学する外国人児童－ミャンマー国境とカンボジア国境の比較－ |
| ３．学会等名<br>九州教育学会第70回大会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>羽谷　沙織 |
| ２．発表標題<br>カンボジア―タイを越境する子供たち ボーダースタディーズの手法を用いた現地調査報告 |
| ３．学会等名<br>国際教育研究フォーラム春季例会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計6件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Toshifumi Hirata ed. | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>Springer | ５．総ページ数<br>317 |
| ３．書名<br>Citizenship Education in the ASEAN Community | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>アメリカ教育学会　編 | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>東信堂 | ５．総ページ数<br>307 |
| ３．書名<br>現代アメリカ教育ハンドブック第2版 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>赤松美和子、若松大祐　編 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>明石書店 | ５．総ページ数<br>420 |
| ３．書名<br>台湾を知るための72章 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>川島真編 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>昭和堂 | ５．総ページ数<br>342 |
| ３．書名<br>ようこそ中華世界へ | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>乾 美紀 編著 | ４．発行年<br>2023年 |
| ２．出版社<br>東信堂 | ５．総ページ数<br>208 |
| ３．書名<br>ASEAN諸国の学校に行けない子どもたち | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>關谷武司編著　北村友人ほか | ４．発行年<br>2018年 |
| ２．出版社<br>関西学院大学出版会 | ５．総ページ数<br>308 |
| ３．書名<br>開発途上国の子どもたち－マクロ政策に資するミクロな修学実態分析－ | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

境界研究の分析法を用いた国境・境界地域における基礎教育に関する国際比較研究
http://border-kaken.officialblog.jp/

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 鈴木　康郎<br>(SUZUKI Koro)<br>(10344847) | 高知県立大学・地域教育研究センター・教授<br>(26401) | |
| 研究分担者 | 山崎　直也<br>(YAMAZAKI Naoya)<br>(10404857) | 帝京大学・外国語学部・教授<br>(32643) | |
| 研究分担者 | 羽谷　沙織<br>(HAGAI Saori)<br>(10576151) | 立命館大学・国際教育推進機構・准教授<br>(34315) | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 楠山　研<br>(KUSUYAMA Ken)<br>(20452328) | 武庫川女子大学・教育学部・准教授<br>(34517) | |
| 研究分担者 | 北村　友人<br>(KITAMURA Yuto)<br>(30362221) | 東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・教授<br>(12601) | |
| 研究分担者 | 鴨川　明子<br>(KAMOGAWA Akiko)<br>(40386545) | 山梨大学・大学院総合研究部・准教授<br>(13501) | |
| 研究分担者 | 渡邊　あや<br>(WATANABE Aya)<br>(60449105) | 津田塾大学・学芸学部・教授<br>(32642) | |
| 研究分担者 | 鈴木　賀映子<br>(SUZUKI Kaeko)<br>(60618221) | 帝京大学・教育学部・准教授<br>(32643) | |
| 研究分担者 | 市川　桂<br>(ICHIKAWA Katsura)<br>(60754546) | 東京海洋大学・学術研究院・准教授<br>(12614) | |
| 研究分担者 | 南部　広孝<br>(NANBU Hirotaka)<br>(70301306) | 京都大学・教育学研究科・教授<br>(14301) | |
| 研究分担者 | 石村　雅雄<br>(ISHIMURA Masao)<br>(80193358) | 鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授<br>(16102) | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | Ｓ　Ｋａｍｐｅｅｒａｐａｒｂ<br>(KAMPEERAPARB Sunate)<br>(90362219) | 名古屋大学・国際開発研究科・准教授<br>(13901) | |
| 研究分担者 | 乾　美紀（寺尾美紀）<br>(INUI Miki)<br>(10379224) | 兵庫県立大学・環境人間学部・教授<br>(24506) | |
| 研究分担者 | 荻巣　崇世<br>(OGISU Takayo)<br>(00743775) | 上智大学・総合グローバル学部・助教<br>(32621) | |

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究協力者 | 澤野　由紀子<br>(SAWANO Yukiko) | 聖心女子大学・現代教養学部・教授 | |
| 研究協力者 | 劉　靖<br>(LIU Jing) | 東北大学・教育学研究科・准教授 | |
| 研究協力者 | 金子　奈央<br>(KANEKO Nao) | 長崎外国語大学・学習支援センター・特別任用講師 | |
| 研究協力者 | ベー　シュウキー<br>(BEH Siewkee) | 大阪大谷大学・教育学部・准教授 | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究協力者 | 平田　利文<br><br>(HIRATA Toshifumi) | 大分大学・教育学部・名誉教授 | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---|---|---|---|---|
| タイ | パヤオ大学 | | | |
| 中国 | 中国教育科学研究院 | | | |
| ベトナム | カントー大学 | | | |
| ラオス | ラオス公共事業省 | | | |